

「ドストエフスキ研究会便り(15)」

ドストエフスキと福沢諭吉、二つの旅

芦川 進一

《講演・研究発表の原稿化》

★これから「ドストエフスキ研究会便り」に今までの講演・研究発表を原稿化して掲載し、完了後は一つのサイトに独立させる予定です。第一回目は「ドストエフスキと福沢諭吉、二つの旅」と題して、昨年2019年2月に「東京YMCA午餐会」で行った講演・卓話を取り上げます。以下は、講演について会員の皆さんに予め周知するため、東京YMCAから依頼されて書いた説明文です。これで講演の趣旨がお分かり頂けると思います。

「ドストエフスキの『夏象冬記』(1863)とは、当時世界の最先端を走るロンドンとパリ二都の目撃記かつ痛烈な弾劾の書であり、そこから後期ドストエフスキ文学が爆発して来る原始星雲のような位置を占めます。今回はこれに、同じ年同じ西欧を旅した福沢諭吉の『西航記』を重ね、二人が見た近代の光と闇について考えます」

★『夏象冬記』(1863)は私が常に立ち返るドストエフスキ研究の原点の一つで、ドストエフスキ研究会に於いても長いこと若者たちと一緒に読み続けてきました。この作品については、既に「研究会便り(2)」や「予備校 graffiti⑥」等でも様々に言及しています。また1989年、この作品をテキストとして河合文化教育研究所の主催で行った連続講座(「エンリッチ講座—ドストエフスキを読む—」)の記録も『^お隕^{にがよもぎ}ちた「^{ほし}苦艾」の星』というタイトルで出版されています(河合文化教育研究所、1997)。

今回の講演でも、私はこの作品に立ち帰って、現在我々が置かれている状況・位置について考えることを試みたのですが、改めて『夏象冬記』の重要性を痛感させられたのです。皆さんもドストエフスキの旅と『夏象冬記』について、福沢諭吉の旅も加えて知って頂き、人間と世界と歴史について思索する上での参考として頂ければ幸いです。

★ここに掲載した文章は、講演のために用意したメモや草稿を参照しつつ、当日配布したプリントの「キー・ワード・50」(巻末)に沿って原稿化をしたものです。文中の(括弧)内のポイントを下げた部分は、原稿化の際に付した「註」です。当日の話を削除した部分や、原稿化の際に加筆した部分も一部ありますが、また話の流れから比較的ゆっくりと説明した部分や、早口で飛ばした部分もありますが、内容・骨格はほぼ講演通りになっていると思います。

YMCA 午餐会・卓話

2019年2月21日 本郷東京大学YMCA

ドストエフスキイと福沢諭吉、二つの旅

河合文化教育研究所研究員 芦川進一

目次

《前半部》	[ページ]
1. はじめに	2
2. 福沢の旅、その目的・期間・旅程	3
3. 『夏象冬記』までのドストエフスキイ	6
4. 西航までの福沢諭吉	11
※ 旅の「資料」について	12
《後半部》	
5. 福沢の「西洋事情探案」	13
6. ドストエフスキイが見たバリ	18
7. ドストエフスキイが見たロンドン	22
8. おわりに	25
※ キー・ワード・50	28
※ 次回の「ドストエフスキイ研究会便り(16)」について	30

《前半部》

1. はじめに

ご紹介いただきました芦川です。今日はお招き有り難うございました。

パンフレットにありますように、大学生の頃から半世紀ほどドストエフスキイと取り組んできました。二十代前半、彼の作品との取り組みから痛感させられたことは、彼が人間と世界とその歴史に潜む深い「病」を描く作家であるということ、そして彼はこの「病」からの「癒し」を求め、聖書世界とその核にあるイエスと正面から取り組んだ人なのだということでした。ドストエフスキイ文学とは、言葉の真の意味で「キリスト教文学」なのだということを実感させられたのです。この「病」ということは、福沢諭吉も「外国交際の病」という言葉を用い、今日の中心テーマとなるものですが、当時私は大学院進学にあたり、ドストエフスキイがこの「病」との、そして聖書との取り組みにおいて、どのようなイエス像を構成したのかを理解しない限り、彼の文学世界と思想を真に理解することも、また我々の生につ

いて理解することも覚束ないと思いました。以来、遅々たる歩みですが、ドストエフスキイと聖書テキストと取り組みつつ、この問題について考えてきました。新約聖書とそのイエス像に的を絞り、ここからドストエフスキイ世界にアプローチをするという姿勢は、日本ではなかなか受け入れられないのですが、ここはYMCAというキリスト教の一つの本山・メッカとも言うべき場です。今日は司会の柴崎聰先生を始め、皆様から様々のご教示を頂けることを期待しております。

全体の組み立てですが、基本的にまずは我々に身近な福沢諭吉に目を向け、彼の西欧への旅を検討し、それからドストエフスキイへという順序を考えています。前半部では、旅に至るまでの二人の「前史」を対照させ（この場合はドストエフスキイを先に扱います）、それぞれが抱えていた問題を幾つか確認しておこうと思います。この対照の作業でロシアと日本の「近代化の時差」が理解され、二人の旅の特色が際立つことになり、彼らが出会った「病」も鮮明に浮かび上がってくることでしょう。お話すべきことは多いのですが、私は時間のコントロールが下手なため、柴崎先生からいつ「終わり！」と宣告されてもよいように、話をひと纏まりごとに完結させつつ進もうと思っています。ではよろしくお願い致します。

2. 福沢の旅、その目的、期間、旅程

今日のテーマは、パンフレットにありますように、福沢諭吉とドストエフスキイの二人が1862年、幕末文久2年のほぼ同時期に、ほぼ同じ西欧各地を巡った旅についてです。しかし二人の旅を逐一扱うと大変な量となりますので、今も述べましたように、最初に二人の旅の事情について見た上で、旅の内容については、彼らが相前後して訪れた二つの街、当時の「世界の首都」とも言うべきパリとロンドンに焦点を絞り、ここから二人が直面した「病」の問題を見てゆこうと思います。

まずは福沢の旅の目的・期間・旅程などについて、基礎的な情報を最小限確認しておきましょう。プリントの「図版」(p.5,p.10)「年表」(p.27)や「地図」(p.15,p.19)、更には「キー・ワード・50」(p.28-p.30)なども適時ご参照下さい。

西欧への旅まで

福沢諭吉の「海外体験」ですが、実は彼はヨーロッパへの旅の二年前(1860年、万延元年)、「安政五か国条約」(後述)の一つである「日米修好通商条約」の批准書交換のため、既にアメリカに派遣されています。「派遣」と言っても福沢はこの時、使節団に乗った咸臨丸の司令官(木村摂津守喜穀)の従者でしかなく(艦長が勝海舟です)、彼のアメリカへの旅は西海岸までに限定されたものでした。しかしこの「アメリカ体験」が生きて、彼は今の外務省にあたる外国方翻訳局に職を得ることになり、今度は江戸幕府が派遣する遣欧外交使節団の傭通詞、つまり正式な通訳の一人としての西欧行きとなったのです。

一歳で父に死なれてから四半世紀、この間「親の敵」とまで憎む封建的門閥制度の中で

諭吉が続けた闘いと、そこで体験した労苦は測り知れず、今も我々の胸を打つドラマに満ちています。しかしこの辺のことをお話しているとキリがありません。この闘いと労苦については、是非『福翁自伝』（1899）をお読み下さい。これは日本の自伝の中でも最高峰の一つとされ、私も幕末から明治にかけての「青春」の見事な一肖像画として愛読し、長い間若者たちにも勧めてきました。

「青春」ということで、エピソードを一つお話します。ある時授業の合間に私が、鎖国日本を背負った福沢たち「大君の使節」の一行が、産業革命を進展させ西洋文明の最先端を突き進むロンドンを訪れたことを話題にしたことがあります。1862年、福沢たちが訪れたこの街では、翌年の開通に向けて既に地下鉄工事(メトロポリタン鉄道)が進んでいたことを話すと、驚くべき問いが返ってきました。「えっ、先生！その頃には日本でも、丸の内線とか銀座線とかが開通していなかったのですか？」——さすがにこのような「豪傑」は極端で稀な例です。しかし「青春」の真只中にいる人たちばかりか政治家も含めて、日本人の歴史意識の無さに驚かされることが少なくありません。亀の甲羅のように硬く古い日本を背負い、「蒸気車」を始めとする西欧の文明世界と向き合った福沢が、その後「文明開化」と「富国強兵」の旗印を掲げて明治維新を推し進め、その先突き当たるに至った壁、この壁をその後我々日本人はどこまで乗り越え得たのか？——今日のテーマである福沢の「壁」、或いは「病」の問題と関係するため、「青春」から「蒸気車」の話へと「脱線」をしてしまいました。実際今日は「蒸気車」を縦糸として話を進めようと思っていますので、この地下鉄工事のことは心に留めておいて頂ければと思います。

[付]

この若い「豪傑」の名誉のために付け加えておきます。彼はロンドンの地下鉄の話に触れたことを契機として、自分の歴史意識の貧弱さに気づき、改めて福沢に関心を抱き、『福翁自伝』を読んで心を揺さぶられ、福沢の設立した慶應義塾大学に進んだのでした。忍耐強い教育の必要を痛感させられたエピソードです。

旅の目的と訪問先

さて遣欧外交使節団の目的は何だったのでしょうか？

ペリー来航は1853年。五年後の1858年には、海外列強の圧力によって、いわゆる「安政五か国条約」(修好通商条約)が締結され、まず神奈川・長崎・函館の三港が貿易港として開かれます。次いで1860年には新潟が、62年には江戸が、そして更に63年には大坂と兵庫が開かれることになっていました。ところがご存知のように、これら三港を開いたことで、日本は世界の貿易市場に組み入れられ、生糸が大量に海外に流失してしまいます。その結果、織物類を始めとする物価が高騰し、国内市場は大混乱に陥ってしまいます。これが広く国民の間に不満と不安を引き起こし、朝廷を中心として尊王攘夷派が

強く前面に登場し、反幕府の機運が高まるのです。このため江戸幕府は、残る両都（江戸と大坂）・両港（新潟と兵庫）の対外開放の延期交渉を目的として、竹内下野守保徳を正使とする遣欧外交使節団をイギリス・フランス・オランダ・プロシヤ・ロシア、そしてポルトガルへと派遣することになったのです（事実、使節団が1月末に出発した後、2月には坂下門外の変、9月には生麦事件など、いわゆる「攘夷テロ」が次々と起こっています。なお「遣欧外交使節団」という名称については、以後は「遣欧使節団」、或いはただ「使節団」と呼ぶこともあります）。

使節団にはこの目的以外に、西欧諸国の近代的諸制度・諸設備について、それらが具体的に如何なるメカニズムで機能しているかを「探索」という使命も課されていました。またロシアとの間で、カラフトにおける日露両国の国境画定の交渉をするという使命もありました。結局は不調に終わった日露交渉について、今日はその具体的な経緯を追う時間はありませんが、これは現在の北方領土交渉の一世紀半前の雛形とも言うべきもので、ロシアが如何に手強い交渉相手であり、国境画定や領土の帰属を巡って、日本の軟な政治家や外交官たちが容易に対し得る相手ではないことは、既にここに明らかです。



1862年の福沢諭吉

パリにて

岩波書店『福沢諭吉全集』第4巻

旅程と期間

プリントの「年表」(p.27)・「地図」(p.15, p.19)をご覧ください。この遣欧使節団はイギリスの軍艦オージン号(帆汽両用二千トン)に乗り込み、1962年1月22日未明、品川沖からヨーロッパに向けて出発をします。今ならシベリア上空を飛行する北回りの旅客機で、十数時間で済むところを、大君の使節団は香港からシンガポール、更にはスリランカのゴールを経て、レセップスが運河を開鑿中のスエズに至り、そこからカイロへ、そして地中海を渡り4月3日のマルセイユ到着まで、二ヵ月半ほどの南回りの船旅をします。この間、彼らはアヘン戦争と続く太平天国の乱やアロー号事件で、またセポイの乱で打ち負かされ疲弊した中国とインドを傍らに見ながら旅を続け、イギリスを始めとする西欧列強が産業革命を進めると共に、圧倒的な軍事力を以って押し進めつつあった海外侵略の脅威を肌で感じ取ってゆくのです。

日程も確認し、ドストエフスキイのそれと重ねておきましょう。福沢の場合は往路と帰路が共に約二ヵ月半、つまり一年の旅の半分近くにあたる五ヵ月間は船中で過ごし、ヨーロッパ滞在は4月3日のマルセイユ到着から、10月22日のリスボン出航までの実質約7ヵ月間となります。ドストエフスキイの旅は6月19日から9月4日までの約二ヵ月半ですから、遣欧外交使節団の欧州滞在期間のほぼ中間部にすっぽりと収まることになります。つまりドストエフスキイの『夏象冬記』の旅は、福沢たちがフランスとイギリスへの訪問を終えた頃に始まり、続いてオランダからプロシヤ、そしてロシアを訪問している間になされ、最後はペテルブルク滞在中の使節団に追いつく形となります。福沢たちのペテルブルク滞在は8月8日から9月17日までですから、ドストエフスキイのペテルブルク帰還を9月4日とすると、二人の足跡はこの街で二週間ほど重なるわけです。彼ら二人は、『罪と罰』のラスコーリニコフがさ迷い歩き、ソーニャが街角に立つペテルブルクで二週間、同じ空気を吸っていたことになります。しかも『福翁自伝』によれば福沢はペテルブルク滞在中、恐らくその才能を買われてでしょう、密かにロシア政府から亡命を働きかけられていたようです。歴史における仮定の話は禁物とされますが、ここは二人の出会いについて、空想・幻想・妄想を様々に働かせてみたところです。しかしこの辺でまた脱線しては話が先に進みません。次は、西欧への旅に至るまでのドストエフスキイと福沢の生、いわゆる「前史」の概要の確認に移りましょう。

3.『夏象冬記』までのドストエフスキイ

今度は先に、ドストエフスキイの方を検討したいと思います。福沢の旅とは対照的に、ドストエフスキイの旅はプライベートなものであり、旅に向かう彼が背負う問題、或いは彼の内に蓄えられた体験も、まずは極めて個人的色彩の強いものだったと言えるでしょう。しかしドストエフスキイが社会とは無縁の「地下生活者」だったわけではなく、祖国ロシアも西欧世界も共に、彼の運命と深く関わっていました。西欧への旅に至るまでの生から、彼の個

性と祖国ロシアとに関わる重要な体験・問題を、三つほど確認しておきましょう。

1. 「死の家」体験
2. 「聖書熟読といふ體驗」
3. 祖国ロシアの西欧化

1. 「死の家」体験

ドストエフスキイは二十代半ば、処女作の『貧しき人々』(1845)で文壇に大デビューを飾ります。敢えて譬えれば、日本で芥川賞と直木賞とを同時受賞したようなものでしょうか。しかし華々しい登場をした青年作家の常で、その後ドストエフスキイが辿ったのは「栄光」とは真逆の道でした。次作『分身』以降は世に受け入れられず、数年後に彼は西欧の革命運動(1848二月革命)と呼応した「反政府陰謀」に加わったかどで逮捕されてしまいます(1849、ペトラシェフスキイ事件)。死刑判決とその疑似執行という懼るべき体験の後、彼を待っていたのは僻遠の地シベリアでの10年間にわたる流刑生活でした(1849~1859)。それまでこの青年が西欧に向けていた眼は、全く逆方向の遙か東方シベリアへと、力づくで押し返されてしまいます。西から東へ。運命の振り子が、大きく揺れたのです。

シベリアでの10年。最初の4年間の懲役囚体験が記された作品が『死の家の記録』です(1861)。タイトルが示すように、彼のシベリア流刑体験とは、それに先立つ(皇帝によって仕組まれた、公開銃殺劇という)死刑体験から始まり、前半の懲役囚体験も、その後の国境警備兵としての勤務体験も、正に「死の家」体験だったと言うべきでしょう。ここで彼がロシア民衆の如何なる闇と光に触れたか、つまり如何に恐ろしい犯罪者・罪人たちと出会い、また逆に如何に善良で純朴な魂に触れたか、そしてこの「死の家」から如何に熱烈に自由に憧れ続けたか——これらのことが見事なリアリズムを以って刻まれているのが『死の家の記録』です。この作品については、彼と距離を置き続けたトルストイやツルゲーネフも称賛を惜しみませんでした。「死の家」という言葉は、シベリア流刑10年の体験ばかりでなく、ドストエフスキイの生と創作全てを貫く象徴性を持つ言葉として記憶に留めておきたいと思います。

1859年の暮、逮捕から10年後、ドストエフスキイは漸くペテルブルクへの帰還を果たします。それから二年半後、三十代全てが詰め込まれた「死の家」体験を背負い、「齢四十」にして、彼はいよいよ西欧へと向かうことになります。運命の振り子がもう一度、今度は東から西へと、大きく逆に振れるのです。

2. 「聖書熟読といふ體驗」

ドストエフスキイの10年にわたるシベリア流刑体験を、「死の家」体験として確認しました。これから彼が西欧で目撃する世界もまた、深い「病」を抱えたもう一つの「死の家」と言うべきものですが、我々はなお暫くシベリアの「死の家」に留まり、『夏象冬記』の旅とも深

く関わる体験を一つ見ておかなければなりません。

懲役囚が「死の家」で読むことを許されたのは、唯一聖書のみでした。ここでドストエフスキイが読んだのは、流刑地に向かう途中、トボリスクでデカブリストの妻たちから与えられた新約聖書でした(1823年版、ロシア語訳新約聖書)。シベリアにおけるドストエフスキイの新約聖書との取り組みを、「聖書熟読といふ体験」として最大限に重視するのは小林秀雄です。彼はここからドストエフスキイの後期作品におけるイエス・キリスト像に肉薄し、見事なドストエフスキイ論を残したのでした(『「白痴」についてⅡ」1964)。シベリアの「死の家」における「聖書熟読といふ体験」とは、ドストエフスキイにとり、「善」と「悪」の両極を新約世界そのままに生きるロシア民衆と出会うことであり、また彼らが「命」とするイエス・キリストの生と死とを、改めて正面から見つめ直すことに他ならなかったのです。人間社会から追放された僻遠の地シベリアの「死の家」、ここでロシア民衆とイエス・キリストとの新たな出会いを果たすこと——運命がドストエフスキイに用意した大きな逆説がここにあったと言うべきでしょう。

「死の家」に於ける「聖書熟読といふ体験」の結果を、一つ確認しておかなければなりません。1854年、既に4年間の懲役を終えたドストエフスキイが国境警備隊に配属されていた時のことです。彼はフォン・ヴィージン婦人(トボリスクで彼に新約聖書を与えたデカブリストの妻たちの一人)に一通の手紙を送ります。これは「死の家」に於ける彼の内面が赤裸々に表白された文章として極めて注目すべきものです。その一節で、彼は自分のことを「時代の子、不信と懐疑の子」とであると告白し、そのような信と不信との間に揺れる自分にも「神が時おり完全な心の平安な時を送ってくれ」、そのような時は「人々を愛し、人々から愛される自分を見出すのです」と記した上で、こう付け加えています。

「このような時、私は自分の内に信条(シムヴォル・ヴェールイ;「信仰告白」「クレド」)を打ち立てました。その信条にあっては、全てが私にとって明白であり神聖です。この信条は極めて簡単なもので、こういうものです。キリストよりも美しく、深く、心を魅きつけ、理性的で、男性的で、そして完全なものは何もない。ないばかりでない、妬ましいほどの愛を以って私は自らに言うのです、あり得ようがないと。そればかりではありません。たとえ誰かが私に、キリストは真理の外にあると証明し、また事実、真理はキリストの外にあるとしても、私には、真理と共にあるよりも、キリストと共に留まる方が望ましいのです」(1854)

「キリストよりも美しく、深く、心を魅きつけ、理性的で、男性的で、そして完全なものは何もない」——世にイエス・キリストについて記した言葉や書物は数限りないでしょう。しかし「美しい」「深い」「心を魅きつける」「理性的な」「男性的な」、そして「完全な」という六つの形容詞を以ってイエス・キリストを言い現わし、このキリストへの絶対の信を己の「信条」(「信仰告白」「クレド」)として表明した人物はまずいないのではないのでしょうか。これ以降

のドストエフスキイの創作活動とは、ここシベリアで得られた六つの形容詞によるイエス・キリストの原像を、不条理と混迷の度をますます強める祖国ロシアと、そのロシアが追いかける西欧文明社会の現実の中で、如何により活きた力ある存在として掘み直し、如何により確かな言葉で表現出来るかという課題の下になされたと言い得るでしょう。シベリアにおける「聖書熟読といふ體驗」——「死の家」がドストエフスキイに与えた體驗と認識の重要性、「死の家」という言葉が担う逆説的象徴性は測り知れないものがあります。

3. 祖国ロシアの西欧化

もう一点、西欧に向かうドストエフスキイについて、福沢とその祖国日本との対照で我々が頭に入れておくべきは、彼の祖国ロシアの西欧化・近代化の歴史です。ピョートル大帝がネヴァ河口の湿地帯を埋め立て、いわば「無」から作り上げたペテルブルクの街を前線基地とし、18世紀以降ロシアは近代化・西欧化政策を強力に押し進めてきたのでした。ピョートルから一世紀半近くが経ち、ドストエフスキイが青年となった頃には、この近代化によって旧き良きスラブ民族の伝統が滅び去ってしまうことへの危惧と反対の論調が強まり、「西欧派」と「スラブ派」とに分かれて激しい論争が繰り広げられていました。彼が『夏象冬記』の旅をする頃も、前年の農奴解放令を巡り国論は大きく割れていたのです。この流れの中で、ドストエフスキイも「土地宣言」を発表し、スラブ民族固有の伝統を保持することの必要を訴え、祖国の運命を深く憂う雑誌編集者・文学者としての面を強く打ち出します。これを右傾化したドストエフスキイと見做す人も少なくありません。しかし西欧文化への彼の尊敬と崇拜の念は強く、そう簡単に彼のことを「右」だとか「左」だとか決めつけることは出来ないでしょう。私はドストエフスキイ自身が、自らの目と心で西欧社会と対峙し、その文化・文明について自らの判断を下すべく西欧に向かったのが『夏象冬記』の旅だと考えています。

『夏象冬記』。この奇妙な名の旅行記は、芭蕉の「夏炉冬扇」という言葉に似て、斜に構えた姿勢を前面に押し出し、そこから繰り出される文章は振れた変化球と言うべきもので、決して読み易いとは言えず、ドストエフスキイの愛読者でさえ敬遠してしまうことが少なくありません。この「クセ玉」から漏れ出てくる筆者の呟きを敢えて言葉にしてみましょう——「シベリアを十年間もウロウロしていたこの私が、四十面を下げて、今更のこのこ西欧に出かけてゆき、どんな《有用な》報告が出来ましょう？ せいぜい《無用な》旅行記を記し、西欧を既に我が家の庭のように知り尽くした皆様方から、馬鹿にされるのがオチでありましょう」。つまり『夏象冬記』とは、ロシアの貴族・インテリに対しては、半ば社会落伍者の立場からする、また西欧先進諸国に対しては、東方の田舎国ロシアの立場からする、自虐的で屈折した心理で色付けをされた独特の旅行記なのです。

ところがこの旅行記は、これから見てゆきますが、一見斜に構えた自虐的な姿勢から繰り出される剛速球、真摯この上ない西欧社会論、翻っての祖国ロシア論なのです。更に言えばこれは何よりも西欧近代を支配する「病」との正面からの対決の書であり、また預言者的熱

情が脈打つキリスト教的宗教論とも言い得るでしょう。パンフレットに記しましたが、「そこから後期ドストエフスキイ文学が爆発的に生まれ出てくる原始星雲のような作品」、それが『夏象冬記』なのです。

以上「死の家」体験・「聖書熟読といふ体験」・「祖国ロシアの西欧化」、これら三つの角度から、西欧社会に向かう前、ドストエフスキイが如何なる体験と問題を背負っていたかを確認してきました。ここから福沢諭吉に進みましょう。



1863年のドストエフスキイ

『アルバム ドストエフスキイ』

GALLIMARD PARIS

4. 西航までの福沢諭吉

西欧に行くまでの福沢諭吉を知るために、三つのテーマを検討しておきましょう。用いる主な資料は『福翁自伝』ですが、ここに記された福沢の体験と彼が背負った問題については、舞台が日本ということもあり、比較的理解し易いと思います。先のドストエフスキイと対照させつつ、以下三つを一纏めにしてお話します。

1. (「死の家」体験に対して)「蘭学修行」
2. (「聖書熟読といふ體驗」に対して)「カラリとした精神」
3. (「祖国ロシアの西欧化」に対して)「日本の鎖国と門閥制度」

鎖国・門閥制度と「蘭学修行」

皆さんもご存知のように、福沢は江戸幕府が武力を背景に押し付けた「人民」統治の手段、「門閥制度」を「親の敵」とまで忌み嫌っていました。彼の精神も体質も共に、日本人民を二世紀半にもわたり武力を以って支配し、やがては因襲の囚われ人にし、身動き出来なくさせてしまった「門閥政治」、つまり將軍を頂点とする武士階級の儒教的「礼楽征伐を以て、下民を御するの流儀」を受けつけなかったのです。明治の新時代を切り拓いた痛快な反逆精神、開かれた精神がここにあります。この福沢が「親の敵」と闘うべく手にした武器は刀や大砲でなく洋学、殊に蘭学でした。彼の蘭学修行について、簡単に見ておきましょう。

ドストエフスキイの祖国ロシアが、18世紀初頭からピョートル大帝の下に西欧化政策を押し進めてきたのに対し、我が国は17世紀初頭から国を閉ざし、「鎖国」政策を取り続けてきたのでした。両国の間には一世紀半の、いわば「近代化・西欧化の時差」があったと言えるでしょう。この日本で鎖国の間も細々と続いたのが、長崎の出島を窓口として入ってくる洋学、殊に蘭学の習得でした。19世紀に入り、日本が次々と海外列強の脅威に曝されると、この蘭学が俄然脚光を浴び、戦略的・防衛的目的から各藩が競ってこれを家臣に学ばせることになります。福沢諭吉も、大きくはこの流れの中で、長崎への「砲術」修行に出かけ、更には大坂適塾の緒方洪庵の下で二年間の蘭学修行を積むことになります。

『福翁自伝』の中でも最も輝かしい光彩を放つのが適塾での修行時代で、ここには福沢の蘭学修行の思い出が、活き活きとしたタッチで数多く記されています。蘭学が、と言うことは西欧の合理的・実証的・科学的思考が、彼の生来の気質や才能と如何にピッタリと合っていたか深く納得させられます。誰の人生にも、運命が有無を言わずその人を導き入れ、その人の内に秘められた可能性を鍛え上げる「修行期」というものが存在するとすれば、私はドストエフスキイの「死の家」に於ける「聖書熟読といふ體驗」と、福沢の大坂適塾緒方洪庵の下での「蘭学修行」が、それぞれの人生の土台を造った掛け替えのない「修行期」であったと考えています。

「カラリとした精神」

聖書と蘭学の「修行期」。ここから更にその背後にある二人の精神の特性について、もう少し考えておきたいと思います。シベリアで新約聖書とひたすら向き合ったドストエフスキイの宗教性に対して、福沢の最大の特徴は、その合理的・実証的・科学的思考であると言えるでしょう。彼自身もそれを「カラリとした精神」と呼んでいて、ここに福沢を、そしてドストエフスキイを理解する上での大きな鍵があると思われます。

『福翁自伝』にある有名なエピソードを見ておきましょう。諭吉は、自分の兄や故郷中津の人々が囚われる旧い儒教精神や因襲への反発から、彼らが後生大事に守り続ける偶像の実体を暴露しようと試みたと記します——まず彼がしたこととは、叔父の家のお稲荷様の社（やしろ）に何が入っているか、開けて見ることでした。そこにあったのは石でした。それを投げ捨ててしまった彼は、代わりにまた別の石を入れておきます。次は隣家のお稲荷様で、諭吉がその内に見出したのは、木のお札のようなものでした。これも捨てられてしまいます。その内に初午（はつうま）となって、皆が幟（のぼり）を立てたり太鼓を叩いたり、また御神酒（おみき）を上げてワイワイと騒いでいます。これを見た諭吉は言います。「馬鹿め、乃公（おれ）の入れておいた石に御神酒を上げて拝んでいるとは面白い」。福沢諭吉という人間の精神が鮮やかに浮かび上がってくるエピソードです。

この一節を彼はこう括っています。

「幼少の時から神様が怖いだの仏さまが有難いだのということは一寸もない。ト巫（う）らない）呪詛（おまじない）一切不信仰で、狐狸が付くというようなことは始めから馬鹿にして少しも信じない。子供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした」

シベリアの「死の家」で新約聖書を熟読し、そこからキリストの「信条」を見出すに至ったドストエフスキイに対し、適塾での蘭学修行で鍛えられた福沢の「カラリとした精神」は、やがて訪れる西欧世界の「お稲荷様の社」の中に何を見出すのか？——このことは今日の最も大きな問題の一つとなるでしょう。

以上、駆け足ですが、二人の西欧への旅に先立つ最低限の前提を三つずつ確認してきました。後半では彼らがパリとロンドンで何を見て、そこに如何なる「病」を見出したのか、限られた時間ですが、二人の西欧体験と認識の特徴がよく現れ出たところに的を絞って確認してゆきたいと思います。

※旅の資料について

ここで資料について述べておきます。

福沢の旅は、江戸幕府の遣欧外交使節団の傭通詞としての旅であり、彼は政府間の開市・開港の延期交渉に直接あたる立場にはなく、主たる役割は西洋文明の制度がそもそも如何な

るものであるか、それらが具体的に如何なるメカニズムの下に機能しているかを「探索」することになりました。彼は旅の間に記したメモ『西航手帳』を基に、翌年『西航記』（1863）を書き上げます。更にこれらを踏まえて著わされたのが『西洋事情』（1866）であり、ご存知のように、これが数十万部も飛ぶように売れ、幕末のベストセラーとなります（現代では数百万部の売れ行きに相当すると言われます）。これにより多くの日本人が、西洋社会とその文明に向かって目を啓かれたのでした。彼の啓蒙活動に於ける著作の結実が明治十年（1875）に出版された『文明論之概略』ですが、これについては後半部で取り上げましょう。

一方ドストエフスキイの旅の記録は、旅の翌年（1863）に『夏象冬記』として発表されます。これが福沢の『西航手帳』、殊に『西航記』に対応するとすれば、『西洋事情』にあたるドストエフスキイの旅の成果は、直接的には『地下生活者の手記』（1864）、そして『罪と罰』（1866）だと考えてよいでしょう。『カラマーゾフの兄弟』（1880）に至る作品群の内にも、この旅で彼が得た認識と問題意識が様々な形で生かされていることは言うまでもなく、『夏象冬記』がドストエフスキイの創作に於いて占める役割の大きさは測り知れません。

このように二人の著作の対応関係を定めることで、二人の旅自体の対応関係に加えて、その後二人がどのような思索を展開したかの足跡を知る手掛かりも得られると思いますので、参考になさって下さい。

《後半部》

5. 福沢の「西洋事情探索」

1862年のロンドン。ここでは翌年の開通を目指して、地下鉄の工事が進んでいたことは先にお話しました。幕末の日本では、旅と言えば徒歩が主で、あとは馬か牛車か駕籠を利用しての旅の時代です。蒸気機関を利用した蒸気機関車、いわゆる「蒸気車」が19世紀の産業革命を飛躍的に進展させたと言われますが、この蒸気車に沿って福沢とドストエフスキイの旅を追うことで、それぞれの旅の特色と共に、二人の感受性や思索の独自性が相当明瞭に浮かび上がってくると思います。まず福沢から見てみましょう。

スエズと蒸気車

福沢たち遣欧使節団が初めて蒸気車を体験するのは、スエズに着いた時のことです。彼らはスエズからカイロまで蒸気車に乗るのですが、福沢はこの旅のことを『西航記』に、まずは「第二時、蒸気車に乗りシェエズを発し、第七時三十ミニュート、カイロに着す。シェエズよ

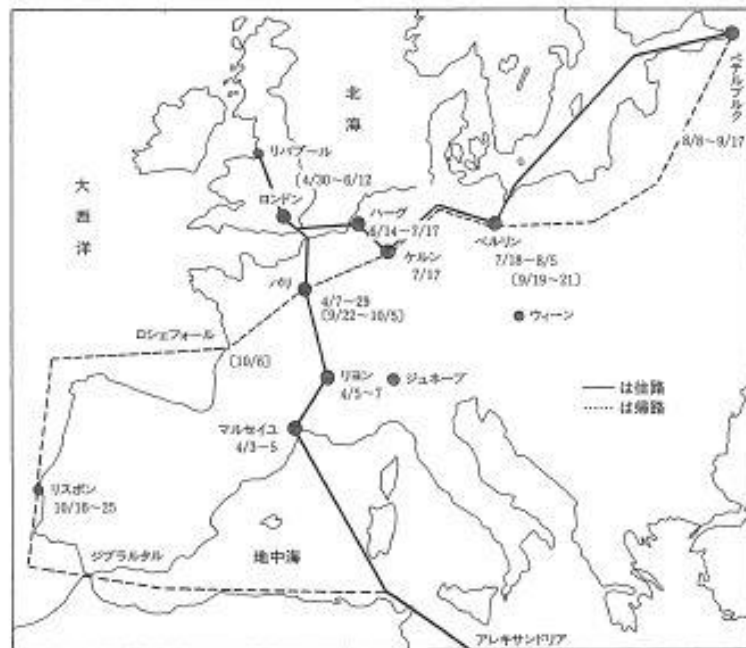
りカイロの鐵路72里」という記述から始めて、途中の停車時間、所要時間、沿線の風景、備品の供給場、天候などについて記し、欄外にはこの鉄道が1858年に敷設されたことを記しています。この時既にレセップスがスエズ運河を開鑿中だったのですが、彼らはこの事実を知らされなかったようです。福沢がスエズ運河の情報を『西航手帳』に書き留めるのは一か月後、パリに着いてから後のことです。

注意すべきは、スエズ-カイロ間の蒸気車の旅のことにせよ、スエズ運河開鑿事業のことにせよ、福沢の記録の特色は、まずは事柄自体を客観的かつ詳細にメモするところにあります。今紹介した部分も、続いて「72里の鐵路を走るに五時二ミニュートを費やすなり」とか、「シェエズよりカイロまでの間は概ね皆砂山にして満目樹林なし。唯七里八里毎に、鐵路の傍に小屋三軒ありて、蒸気車の欠乏品を給するに備う」というように、細かな観察の結果が着々と刻まれてゆきます。彼が『西航手帳』にパリで書き足し、翌年『西航記』に記した記録でも、一か月前にスエズで乗った蒸気車が再度取り上げられ、カイロ以南がフランスの、カイロ以北がイギリスの管轄下にあることなどが新たに書き留められます。スエズ運河については、福沢の目は運河開鑿を進める組織に注がれ、この紅海と地中海とを繋ぐ「掘割」の工事は、フランスの或る「商社」（今の株式会社）が中心となり、各国の商社との共同事業として進められているとされます。更に砂漠の掘削には、紅海と地中海の水位間にある一メートルの段差が利用されていると、その具体的な工法までが記されるという具合です。

以上の例から分かるように、福沢の記録とは蘭学修行で鍛えられた合理的・実証的・科学的な観察を土台とするもので、対象が日常機能するメカニズムについての具体的かつ詳細な「探索」の報告であるところに最大の特色があると言えるでしょう。このような「リアリズム」に立つ彼の仕事は、生来の「カラリとした精神」とビタリ呼応するものであり、遣欧使節団が使命の一つとした「西欧事情探索」を果たすに最適だったと言えるでしょう。

蒸気車についての「探索」の記録を、『西航記』の基となった『西航手帳』でもう少し追っておきましょう。今まで見たメモに加えて、福沢は更にマルセイユからパリまでの鉄道敷設の経費について、その運賃について、また荷物の夜間運送について等々もメモし、更に鉄道敷設に必要な巨額の経費は政府が出資するのではなく、各商社が分担して負担することなども記します。この『西航手帳』を受けた『西航記』では更に加えて、鉄道の建設が「鐵路商社」の組織の設立から始まり、社会への公布による資金の調達、事業の展開、歳入・歳出の会計管理による利益の発生、出資者への利益の分配という具合に、「商社」のメカニズムがそのまま鉄道事業にも働いていることが記されます。また鐵路商社は政府に税金を納めない代わりに、百年が経つと全てを政府に納め、全くの官有鉄道となるという仕組みや、政府関係の荷物は無料で運ぶこと、公用で蒸気車を利用する場合には運賃が四分の一に減額されることなどの運営細目までもが記されます——スエズで初めて乗った蒸気車についてのメモから、鉄道商社が文明社会の中で働くメカニズムの解析に至るまで、福沢の「西洋事情探索」の概要が、以上で伺われるかと思います。

福沢諭吉の旅程



福沢諭吉の旅程 4月3日～10月25日（〔 〕内は増路の日付）

『西航記』から『西洋事情』へ、そして『文明論之概略』へ

福沢の合理的・客観的・科学的思考による「西洋事情探索」はこれに留まりませんでした。文字通りの「幕末」、1866年から出版される『西洋事情』では、西洋文明社会を支える「自由」の理念を核に、政治・教育・経済・外交などの基本概念と、その具体的な展開である諸制度や諸設備が原理的体系的に説明されます。蒸気車の場合も、その基となる「蒸気」自体の説明から「蒸気機関」の説明へ、更には「蒸気船」や「蒸気車」へ、そして「鉄道蒸気車」を発明したスチーブンスンの紹介へと進み、最後はこれらを用いた近代西洋文明が、最初は自己の利益追求を以って始まりながらも、フェアな利益追求が行われる限り、自ずと社会構成員の間で利益調整が行われ、文明社会全体の発展・向上につながる事が説かれます。彼は「蒸気車」一点からでさえ、西洋文明全体の構造と機能を原理的体系的に理解し、しかも平明な言葉で説明する「才力」を備えていたのです。

福沢諭吉の教育・啓蒙活動とは、その「カラリとした精神」を土台として、「文明」という蒸気車に祖国日本を一刻も早く飛び乗らせ、既に近代化のレール上の遙か先を疾走する列強

諸国に追いつかせようとする試みだったと言えるでしょう。聖徳太子に続き、現在福沢の肖像が日本紙幣の最高位である一万円札に用いられているという事実が、幕末から明治以降の日本に於いて彼が果たした役割を何よりも雄弁に示すものでしょう。

『文明論之概略』、文明開化に射す影

最後に明治維新から十年ほどが経った1875年、福沢が著した『文明論之概略』について取り上げ、彼の旅の検討を終えたいと思います。『西航手帳』から『西航記』、そして『西洋事情』に至る西洋文明探索の成果を受けて、この『文明論之概略』とは福沢の西洋文明との取り組みの、そして彼の啓蒙活動の総決算の書とも言うべき見事な著作です。注目すべきは、ここで福沢が自分の行き当たった「壁」、或いは「病」について記すことです。つまり明治維新によって「文明開化」の道を歩み出したものの、日本人は十年も経ない内に「文明」を支える「智慧」も「徳義」もどこかへ放り捨ててしまい、「討死にも損なり、敵討も空なり、師に出れば危し、腹を切れば痛し、学問も仕官も唯銭のためのみ」という精神状態を呈し始めてしまったと言うのです。「今の人民は重荷を卸して正に休息する者なり」。

「休息する」人民。その魂にぽっかりと開いた空洞。やがてドストエフスキイがパリを訪れ、そこに見出すのも「縮こまってゆく精神」です。フランス革命を成し遂げたフランス人たちが、最早革命の理念も情熱も棄て去り、ナポレオン三世の治下、その魂を「小銭の精神」に売り渡してしまった現実です。この問題については次に取り上げましょう。文明開化と明治維新の道を疾走してきた福沢。その「カラリとした精神」では理解し兼ねる現実、対処し切れない問題が立ち現れたのです。今までの努力の一切を無としてしまうような「壁」、「休息する」人民の魂の空洞という「病」を前にして、福沢が新たに自らに課すのは、この空洞を埋め得るのは如何なる制度・価値観かという問いです。「カラリとした精神」の強靱な思索力を以って福沢が向かう対象は、「天皇制」と「キリスト教」と「儒教」の三つです。

「天皇制」と「キリスト教」と「儒教」

明治の新時代を切り拓きはしたものの、日本人の魂にぽっかりと開いてしまった空洞。これを埋めるべき価値観・制度として、福沢が第一に検討をするのは天皇制です。福沢は、日本では七百年もの長きにわたって武家政治が続き、天皇の存在は既に「人民」の心からは遠く離れたものになってしまっているとします。この厳然たる歴史の事実を前に、幕末の尊王攘夷運動から始まって、今も明治政府が人民統治の手段として、急遽天皇の存在を前面に押し出そうとしているが、それは無理だと言うのです。福沢の「カラリとした精神」、醒めた眼力の前に、明治の維新政府が作り上げようとしていた天皇神話創作のカラクリは、見え透いた茶番でしかなかったのです。福沢の見事な思索と論証の冴えがここにあります。

次にキリスト教です。福沢によればキリスト教とは、本来「永遠無窮」を目指し、人間と世界と歴史の一切を「永遠の相」の下に見る宗教であり、そこからは「此地球は恰も一家の如く、地球上の人民は等しく兄弟の如くにして、其相交るの情に厚薄の差ある可らず」——こ

こでも福沢の「カラリとした精神」、その醒めた眼は、キリスト教の「隣人愛」あるいは「友愛」の理念を驚くべきほどの的確さで捉えていると言うべきでしょう。ところが福沢によれば、西洋の文明諸国はキリスト教国でありながら、他の国々を「一家」の一員、「兄弟」として扱うどころか、競って世界中を武力で侵略して植民地とし、残虐な支配と過酷な搾取を繰り広げている張本人なのです。これはやがてドストエフスキイが『罪と罰』のラスコーリニコフに、そして『カラマーゾフの兄弟』のイワンに凝視させ弾劾させる地上世界の現実、「神の世界」の不条理で醜惡な相貌に他なりません。キリスト教もまた斥けられるのです。ここにあるものもまた、福沢の思索と論証の見事な冴えと言うべきでしょう。

では儒教はどうでしょうか？ そもそも『文明論之概略』に於いて最もしばしば批判・弾劾の対象とされるのは、徳川幕府が二世紀半もの長きにわたり採ってきた儒教的価値観に基づく人民統治に他なりません。忠孝の精神と武力とを以てする人民支配、即ち儒教的「礼樂征伐を以て下民を御するの流儀」こそ、福沢が「親の敵」とする封建的「門閥制度」を作り上げてきた元凶であり、人民が進むべき文明への道を逆戻りさせる反動以外の何ものでもなかったのです。

かくして、現代でも類を見ないような骨太な思索によって、天皇制とキリスト教、そして儒教が次々裁断されました。では福沢は何によって、また如何にして「休息する」人民の魂の空洞を埋めようとするのでしょうか？ ここに打ち出されるのが「病」、「外国交際の病」という福沢独自の概念です。

「外国交際の病」

「外国交際の病」。少々聞き慣れない言葉かもしれませんが、最後に我々が取り上げるのはこの言葉です。「文明開化」と共に、西洋列強による帝国主義的海外侵略の荒波に巻き込まれた日本、福沢はこの日本が置かれた困難で危機的な国際情勢を指して「外国交際の病」と呼ぶのです。この「病」、日本人民と日本が早くも陥ってしまった「休息」の底から再び目を覚まし、真の「一身独立」「一国独立」を果たすためには如何にすべきか？—— この喫緊の問題に対する解決策とは、今まで我々が見てきた福沢の性向と努力の方向からすれば、たとえ膨大な時間が必要だとは言え、まずは一人一人の日本人民を内から啓蒙すること、つまり「草の根」民主主義的で地道な啓蒙的教育を積み重ねることであり、この土台の上に社会改革と国家建設を目指すことだと考えるのが自然でしょう。言い換えれば、今や「維新」への高き「志」を忘れ、「唯錢のため」に生きる人民、つまり「休息する」人民の魂の空洞を埋めて「一身独立」を果たさせ、この盤石の土台の上に、人民に一丸となって確たる文明国を築き上げさせ、「一国独立」を果たさせるというのが、福沢が本来目指していた方向であり、採るべき最善の方策であったと考えられるのです。

ところが「外国交際の病」への強い危機感から、その後福沢が取ったのは明治政府と相呼応する「文明開化」から「富国強兵」への道、即ち天皇神話創作の上に立つ「国権中心」の道だったのです。そして周知の如く、日本がその先辿ったのは武力外交を前面に押し出しての

アジア侵略と、その惨憺たる挫折・敗退への道でした。福沢と日本が歩んだ道を考える時、私は暗澹たる思いに捕われざるを得ません。彼が突き当たった「壁」、凝視した「病」は、今もなお我々の眼前に厳存する「壁」であり、我々の内に宿る「病」だからです。

今日の私の話は、福沢が提示した「外国交際の病」という問題の困難さを指摘することで終えることも可能でしょう。しかし我々はもう一つ、ドストエフスキイが西欧への旅で見出した「病」の確認をしなければなりません。YMCAの皆さんには、福沢と同じく西欧社会とその「病」を前にしたドストエフスキイが、聖書の磁場での思索を展開する方向性は容易に理解して頂けると思います。説明はクレッシェンド的に早くなりますが、お許し下さい。

6. ドストエフスキイが見たパリ

ドストエフスキイの蒸気車

今日は「蒸気車」という角度から福沢の旅に光を当ててきました。『夏象冬記』においても我々は、福沢とは対照的な形で、蒸気車に対する極めてドストエフスキイ的な反応、それも強い拒絶反応と出会うことになります。西欧に赴くにあたり、彼も蒸気車を利用するのですが、その反応は蒸気車の旅の恐ろしい退屈さと憂愁に対する激しい「否」です。

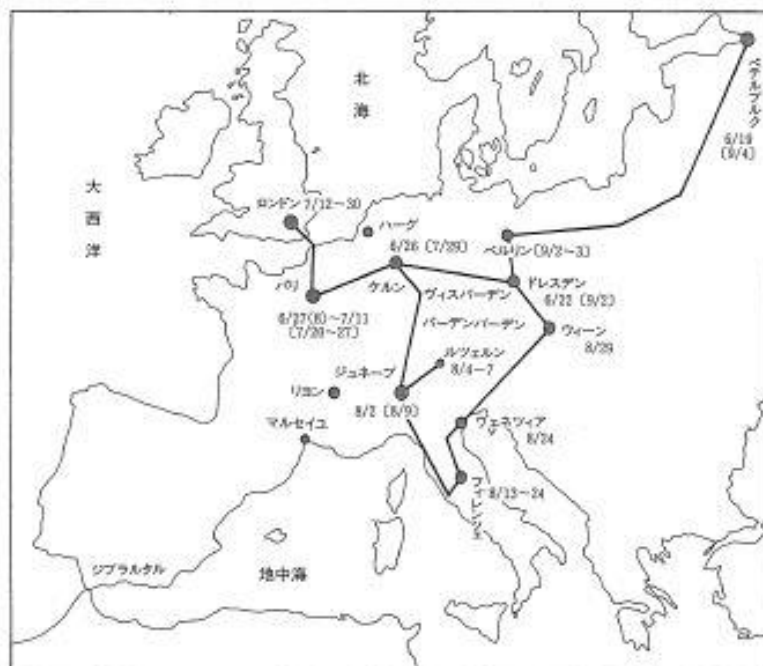
「ああ、蒸気車の中に何もする事なく座っているのは、何と退屈なことか」

(『夏象冬記』第2章)

この慨嘆に留まりません。彼は蒸気車から外に飛び出て、「自分の足で走り出すのだ」とヒステリックな叫びさえ上げるのです。どこまでも続くレールの平行線、そしてその上を疾走する蒸気車。これは近代の合理的・実証的・科学的精神が生んだ見事な結実であり、福沢はそれを凝視し、「探索」と記録を絶え間なく続けたのでした。ところがドストエフスキイがレールの作る無限の平行軌道と、その上を走り続ける蒸気車に感じ取ったのは、人間精神の自由を窒息させる「合理主義精神」、言い換えれば精神の絶対的恣意性を奪い取る「病」だったのです。『夏象冬記』の翌年に発表されるのは『地下生活者の手記』ですが、ここでは自らを「病人」であり「意地悪な人間」だと宣言する主人公が、至る所で「 $2 \times 2 = 4$ は死の始まりだ」とか、「ピアノの鍵盤」や「対数表」や「蟻塚」、そして「水晶宮」等々が現わす近代合理主義精神への激しい揶揄嘲笑と弾劾の叫びを挙げ続けるでしょう。

以下に見るように、ドストエフスキイがこの蒸気車の旅の延長線上にパリで見出すのは、ナポレオン三世から与えられた相対的な秩序と平安、文明の蒸気車に身を任せて満足し切った小市民たちの姿です。一昔前、そのために命を賭して戦った「自由・平等・友愛」というフランス革命の理念は、ここでは最早失われてしまった——ドストエフスキイはフランスが、そして西欧社会が陥った深い「病」を鋭く見て取るのです。

ドストエフスキイの旅程



ドストエフスキイの旅程 6月19日～9月4日 ([]内は再訪・帰途の日付)

「縮こまってゆく」精神、そして「小銭」の精神

ドストエフスキイが訪れたパリでは、折しもオスマン知事の下に街の大改造が進行中でした。入り組んだ旧い街路は整備され直し、シャンゼリゼの大通りも、現在我々が目にするような煌びやかで整然たる大街路として登場します。この大改造には都市の景観上の配慮もありましたが、大街路に沿って大砲の弾丸を真直ぐに飛ばすことで、反乱者たちの制圧を容易にしようという軍事上・治安上の目的もあったのです。日本からの使節団は、パレ・ロワイヤル広場に面した客室600もあるルーブル・ホテルに迎えられ、パリっ子たちが注ぐ好奇の眼差しの中、整然と秩序立てられた「花の都」「光の都」が放つ文明の息吹を肌で感じ取ったのでした。ドストエフスキイがパリを訪れるのは、福沢たちの訪問から約二ヵ月半後の6月末ですが、彼がこの街に注ぐ目はこの上なく鋭利で毒に満ちたものです。

「パリは縮こまってゆく。何か嬉々として、愛情さえ抱いて小さくなってゆく、感動と共に身を縮めてゆく」

「一体全体どうして、ここでは全てが小さくなってゆくのだろう。一体どうして、全てが小銭に身を変えたがり、遠慮をしたり、気づかれないうちに身を隠したがりしているのだろう」 （『夏象冬記』第6章）

「縮こまってゆく」街、「全てが小銭に身を変えたがる」街、パリ —— ここにあるのは詩人ドストエフスキイの直観であり、更にその奥に潜むのは預言者ドストエフスキイの洞察だと言えるでしょう。思い出すべきは、ドストエフスキイと同年生まれの詩人ボードレールです。丁度この頃パリの街では『悪の華』（1857）の詩人が、『赤裸の心』や『パリの憂愁』を見事な言葉に刻み、パリに満ちる小市民（プチブル）たちを「畜群」として弾劾していました。ドストエフスキイは一旅行者でしかありませんでしたが、パリの街の整然とした秩序の内に、ボードレールが見つめていたのと同じ「畜群」の存在を認め、かつての革命の精神が今や「小銭の精神」に変じてしまったのを直観したと言えるでしょう。因みにボードレールにとって、福沢たち日本からの使節団は、「日本人は猿だと聞いた」というメモ一行分の存在でしかありませんでした。この時詩人が見つめていたのは、異国からやってきた「猿」たちなどではなく、その向こうの「畜群」、つまり「猿」たちを好奇の目で眺めてはお喋りの種とする小市民たちの存在であり、更には彼らを偽りの安定と自由の内に憩わせ、遂にはその精神を「縮こまらせ」、死に至らせる「大審問官」ナポレオン三世の支配だったと考えるべきでしょう。1821年、同年生まれの二人は、パリっ子たちが陥った「病」を、内と外とから容赦なく見つめ弾劾する詩人であり預言者だったのです。

フランス革命の精神、「自由・平等・友愛」の行方

「縮こまってゆく」精神、そして「小銭」の精神。パリへの痛烈な揶揄と弾劾の抛って来るところは、フランス人たちに対するドストエフスキイの深い失望にあると考えられます。彼はパリに着くや、「自由・平等・友愛」という旗印を高く掲げ、18世紀末、命を賭してフランス革命を戦ったフランス人たちが、今やその理念を棄て去ってしまっていると見て取ったのです。フランス革命の理念は、ドイツのシラー的浪漫主義精神と共に、ドストエフスキイの魂を生涯掻き立て続けたものであり、この作家が描く殆どの若者たちは、どこまでも「美と崇高なるもの」を望み、その胸には熱い「炎」を燃やす存在です。この若者たちがその炎をフランス革命の理念やドイツのロマン主義精神から汲み取っていることを知るには、例えば『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフとその妹ドゥーニャ、またその恋人ラズーミヒンに目を向けるだけで十分でしょう。

さて「自由・平等・友愛」—— 1862年、ドストエフスキイが現実目に目にしたパリに於いて、「自由」とは百万フランを握る者だけが手にする特権でした。そんな「百万フランの自由」しかない世界に、と彼は問います、「平等」などどうして存在し得ようか？ また「友愛」の精神も、と彼は断言します、そもそも個人主義と他者との対立を基本原理とする西欧社会に存在などしないのだ！ 前世紀末フランス革命を導いたばかりか、西欧文化・文明の根底を

なすとされる理念・精神そのものが全て、完膚無き迄に否定されるのです。

我々はここで話をロンドンに移したいのですが、なおパリには一つ、無視して通り過ぎることの出来ない問題が存在します。ドストエフスキイはフランスばかりか、そもそも西欧社会に「友愛」の精神は存在しないとしたのですが、更に進んで、恐らく彼が心の奥深くに秘めていた、そしてこれから彼の思想の核となるであろう信念の表明に至るのです。

「自己犠牲」の精神

西欧社会が拠って立つ「個人主義」の原理と「他者との対立」の原理。これに対してドストエフスキイが表明するのは、個人が「何よりもまず社会に対し己の《我》の一切、自己の一切を犠牲として捧げ、自己の権利を要求しないばかりか、その逆に、社会に己を一切無条件で捧げなければならない」という信念です。この自己犠牲論は、それまでのパリ論を支配していた毒に満ちた皮肉と揶揄、そして弾劾の調子とは打って変わり、生真面目な調子が正面に出て、読んでいてもドストエフスキイは何処まで本気なのかと容易には信じ難く、何時この論調がひっくり返されるかと、落ち着かない気持ちにさせられてしまいます。しかし我々は間もなく彼が本気であること、ストレートの剛速球を投げ込んでいることに気づかされるのです。恐らく彼の全作品中でも、『カラマーゾフの兄弟』に於けるゾシマ長老の説教以外に、これほど正面から「自己犠牲」の精神が説かれることはないでしょう。

「是非、私の言うことを分かって欲しい。自発的に、完全に自覚的に、しかも誰からも強制されずに、全ての人に自分の全てを自己犠牲として捧げること、これこそ、私に言わせれば、個性の最高度の発達と、個性の最高度の発威と、最高度の自己抑制を表わすものであり、かつ自己の意思の最高度の自由を表わすものなのだ。全ての人のために、自発的に自分の生命を投げ出すこと、全ての人のために十字架や火刑台に上ること、これらのことは個性が最高度に発達して初めて可能なのだ。最高度の発達段階に達した個性は、個性が個性であることの権利を確信し、最早自分については如何なる恐怖も抱かず、何をするにしても、自己の個性を材料としてすることしか出来ない。つまり、他の全ての人も自分と全く同様に、自発的で幸福な個性になるようにと、全ての人に自分の全てを提供することしか出来ないのである」

（『夏象冬記』第6章）

人間がその個性を最高度に完成させた時とは、自己を完全に他者に捧げる時である —— 私はこの逆説こそがドストエフスキイの人間論と宗教論の極、イエス像の極であると思います。ここでドストエフスキイが見据えるのは、文中にも見られる「十字架」や「火刑台」という言葉からも覗かれるように、ゴルゴタ丘上のイエス磔殺の姿であることは間違いないでしょう。今日は先に、ドストエフスキイがシベリアで記したキリストの「信条」を確認しました。ここパリで彼は、西欧社会の根底をなす個人主義を向こうに置き、シベリアで得た六つの形容詞

によるイエス像の延長線上で、十字架上で磔殺されたイエスに焦点を絞り、このイエス像を具体的に「自己犠牲」論として展開したのだと考えてよいでしょう。

シベリアの六つの形容詞。ゴルゴタの十字架。パリの自己犠牲論 —— 更にこの時、彼の心にあったイエス像を具体的に表現するのは、続いて彼が記すヨハネ福音書の次の言葉でしょう。

「互いに愛し合いなさい。そうすれば、これらのものは全て与えられるであろう」

前半がヨハネ伝（十三 35、或いは十五 21）からの、後半がマタイ伝（六 33）からの引用です。前半の「互いに愛し合いなさい」。これは正に十字架を目前に控えたイエスの「告別説教」のエッセンスとも言うべき言葉で、このイエスの愛の勧告が、自己犠牲論と表裏一体となって、フランスのパリでドストエフスキイが見出した「死に至る病」への処方箋であり、また祖国ロシアに戻り、新たに彼が開始する創作活動の出発点となり、また核ともなると考えてよいでしょう。『地下生活者の手記』のリーザ、『罪と罰』のソーニャ、そして『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老やアリョーシャ —— これらの主人公たちが生きて表現するのは、このイエスの遺訓を受けた犠牲愛、「実行的な愛」に他なりません。

蒸気車への「否」に始まり、パリっ子の「縮こまってゆく」「小銭」の精神への揶揄・嘲笑。フランス革命の理念「自由・平等・友愛」の消滅に対する痛烈な弾劾。西欧の個人主義と対置された自己犠牲論と、十字架を前にしたイエスの愛の勧告の提示 —— ドストエフスキイ文学の核心が、ここパリで表出されたのです。

7. ドストエフスキイが見たロンドン

ドストエフスキイが次に訪れるのは、産業革命の最先端をゆくイギリスの首都ロンドンです。ここでは先に見たように、翌年にはもう地下鉄が開通しようとしていて、アフリカからは冷凍設備を持つ蒸気船が、次々と穀物や野菜産品を運び込んでいました。ロンドンそのものが轟音を上げて世界の最先端を疾走する、正に「蒸気車」だったのです。

ロンドンを表現するドストエフスキイの筆は力強く圧巻です。しかし時間的にそれら全てを確認する余裕はありません。既に我々は福沢諭吉ら遣欧外交使節団の旅を追ひ、またドストエフスキイのパリ論も確認しました。以下に彼のロンドン論のポイントを四つ挙げ、それらに最小限の説明を加えておきますので、あとは皆さんご自身が是非『夏象冬記』をお読みになり、自らの『夏象冬記』を刻んで頂きたいと思います。

1. 「バビロン」ロンドン
2. 「バアル神」の支配

3. ヘイ・マーケットの女性たち

4. 「ラザロの復活」の登場

1. 「バビロン」ロンドン

「縮こまってゆく」「小銭」の精神——ドストエフスキイのパリ論とは、パリっ子たちの心の奥深くにどこまでも分け入ってゆき、彼らがフランス革命の精神を棄て去り、代わって心の内に迎え入れた小市民性と偽善とを厳しく暴き出すという、ミクロ心理学的とも言うべき分析をまずは大きな特徴とするものでした。

これに対するロンドン論はミクロに対するマクロ、眼前に展開する露骨な弱肉強食と人間疎外化現象についての、骨太な描写を最大の特徴とするものです。ドストエフスキイが描き出すロンドンとは、それから四十年近く後、この街に住んだ夏目漱石の筆になる描写と共に(『倫敦日記』1901)、この光景が今も世界の至る所で繰り返されていることをリアルに実感させるもので、我々に文学表現が持つ圧倒的な「力」を感じさせずにはいないでしょう。

殊に注目すべきは、この描写を支配する濃密な終末論的雰囲気です。彼がレポートをするロンドンとは、鬼気迫るリアリズムで描き出された現代の「バビロン」と言うべきもので、19世紀産業革命が現出させたものが、正に黙示録的終末論的世界であることを我々に痛感させずにはいません。事実ここには「主よ、何時まで」(『ヨハネ黙示録』六10)を始めとする、『ヨハネ黙示録』から採られた様々な語句が散りばめられていて、ロンドンの街が「旧きバビロン」と重ねられ、それに代わる「新しきエルサレム」の到来が望見されるという具合に、ドストエフスキイの危機意識と結びついた預言者の聖書的思考が強く前面に打ち出されるのです。

この聖書の磁場と重ねて、ドストエフスキイがロンドンの内に見て取った「病」と、それに対する「処方箋」は如何なる言葉に集約されるのか、見てゆきましょう。

2. 「バアル神」の支配

ロンドンに展開する黙示録的終末論的世界を「バビロン」と呼ぶドストエフスキイは、更に進んで、ここを支配するのが旧約聖書の至る所に記される異教神「バアル」であると断言します。エホバ神の正義も律法も無視し、傲然とただ生命の豊饒とその享受を謳うバアル神。ロンドンに向かうドストエフスキイの眼は、今や預言者のそれに他なりません。

[付]

ドストエフスキイがパリっ子たちの心の空洞に見て取ったのは「縮こまってゆく」「小銭」の精神でした。ロンドンの「バアル神」に対して、それは改めて「マモン神」と呼ぶことが可能でしょう。マタイ伝には「汝ら神と富とに兼仕(かねつか)ふること能はず」(六24)というイエスの言葉があります。「マモン」とはこの「富」或いは「資産」を表わすギリシャ語であり、神と拮抗する地上的な力、悪魔の別称とされます。ヘブライ語のバアルと、ギリシャ語のマモン。ロンドンとパリ。ドストエフスキイは、今や西欧世界を支配するものが、バア

ルとマモンという異教神・悪魔であることを見て取ったのだと言えるでしょう。

[以上は、午餐会・卓話の場では十分に説明しなかった部分で（殊にマタイ伝の引用部分）、改めてここに記しておきます]

かくしてドストエフスキイは、今やロンドンとパリという世界の大都会を支配するのが「バアル」と「マモン」という二大異教神・悪魔であるとして捉え、これら二都の住人たちの心に住み着いた異教神たちこそが、彼らを死に至らせる「病」であるとし、それに対する「幾世紀にもわたる精神的抵抗と否定」の必要を訴えるのです。ドストエフスキイのこの預言者的認識と危機意識から見る時、我々はバアルとマモンという異教神・悪魔が、それから一世紀半以上が経った現在も世界の至る所に支配を広げ、なお露骨に弱肉強食の搾取を続け、人間疎外化状況を推し進めつつあることを認めざるを得ません。そしてこれは、「外国交際の病」という言葉を以って福沢が指摘した現実には他ならないことにも気づかされるのです。

ではこの異教神の支配に対する「幾世紀にもわたる精神的抵抗と否定」の戦いは具体的に何処で、また如何にして可能なのでしょうか？ ドストエフスキイが報告する、歓楽街ヘイ・マーケットに目を向けてみましょう。

3.ヘイ・マーケットの女性たち

今まで我々は「詩人」かつ「預言者」としてのドストエフスキイを見てきました。しかし何よりも彼が「小説家」であることを実感させられるのは、彼が歓楽街のヘイ・マーケットを訪れ、そこで目撃した女性たちについて報告をする時です。この街に身を持ち崩した絶世の美女と、恐らくは彼女に別れを告げるべく訪れた青年。十二-三歳の若い娘と、ここで彼女に客を取らせる母親。半ば意識を失ったかのように群衆の中をさ迷い歩く五-六歳の少女。カトリックの聖書伝道の女性（彼女については、次の4で改めて取り上げます）—— サッと一筆書きで描かれたようなこれら女性たちの描写は、ドストエフスキイの後期作品群に登場する主要な女性たちの祖型・雛形とも言うべきもので、やがて彼女たちは作者の見事な筆によって、永遠の形象を与えられることでしょう。『地下生活者の手記』や『罪と罰』から『カラマーゾフの兄弟』まで、皆さんが彼の後期作品と取り組む際には、ヘイ・マーケットに登場した女性たちのその後の姿が何処に見出せるか、注意をされていて下さい。「小説」を読む楽しさが倍増するに違いありません。また彼女たちが、ドストエフスキイが西欧社会に見出した「死に至る病」への処方箋を、やがて如何なる姿と如何なる仕方でもたらしかを探ることは、ドストエフスキイの思索と創作の本質に迫るスリリングな作業であることも実感されるでしょう。

最後に我々は、それら四人の中から一人、聖書伝道の女性に光を当てておきたいと思えます。彼女は間もなく売春婦のソーニャとして、また彼女に聖書をもたらしリザベータとして『罪と罰』に登場するのですが、更に後には『悪霊』（1872）の最後に聖書売りの女としても登場し、悲劇的な闇を以って終わるこの作品が、実は微かながらも確かな光を宿すことを示す、重要な役割を果たすでしょう。

4. 「ラザロの復活」の登場

ヘイ・マーケットで最後に描き出されるのは、カトリックの聖書伝道の女性です。全身黒ずくめの服を纏ったこの女性から、ドストエフスキイは一枚の小さな紙切れを手渡されます。そこにはフランス語で、片面に「汝これを信ずるか？」と記され、その裏には「我は復活なり、生命なり」と印刷されていました。皆さんには周知のヨハネ福音書「ラザロの復活」の場面で、ラザロの姉妹マルタに対してイエスが発する言葉です。死後四日、既に腐臭を放つ兄弟ラザロの墓の前、イエスによる復活を信じるとは言うものの、なお旧き信仰の枠から抜け切らずにいるマルタに対して、イエスは厳しく迫ります。

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし、汝これを信ずるか」(ヨハネ十一 25・26)

そしてラザロの復活 ――この「ラザロの復活」のテーマが正面から取り上げられるのは、『夏象冬記』の旅から四年後の『罪と罰』に於いてです。「ヘイ・マーケット」とは「乾草市場」のことであり、この作品にペテルブルクの「乾草市場」(センナヤ・ブローシャヂ)で客を引く売春婦として登場するのがソーニャです。ご存知のように、ソーニャとは自らが追い込まれた「もうこれ以上、何処にも行き場のない」地獄の底で、ひたすらイエスを見つめて生きる存在であり、彼女はただこの信一つを以って殺人者ラスコーリニコフを死から復活させるのです。ここにパリの自己犠牲論と結びついたイエス像が存在することは明らかです。ラスコーリニコフに請われ、ソーニャが「ラザロの復活」を朗読する場面は、この作品ばかりかドストエフスキイ文学全てを、そしてソーニャに仮託してドストエフスキイ自身の信を表明する象徴的場面となるのです。

聖書伝道の女性から手渡されたパンフレットと共に、ヘイ・マーケットで出会った女性たちを胸に収めたドストエフスキイは、その後この女性たちを様々な作品の様々な現実の中に様々な人物像として描き出し、バアルとマモンに対する「幾世紀にもわたる精神的抵抗と否定」の戦いを、具体的に犠牲愛・「実行的な愛」の実践として展開してゆくのです。

8. おわりに

1862年、福沢諭吉とドストエフスキイが共にした西欧社会への旅を追ってきました。我々の前には、旅の途上であれ帰国後であれ、パリとロンドンと対峙した二人の反応が、それぞれに大きく浮かび上がってきました。二都から与えられた衝撃は大きく、二人はそれぞれに西欧近代文明の光と同時に闇にも突き当たり、その闇を「病」として捉え、それへの処方箋を見出すことを、以後最大の課題とするに至ったと言ってもよいでしょう。

私は二人が西欧文明の内に見出したのは基本的に同じ「病」であり、その深刻さであると

思います。明治維新からわずか十年、「唯銭のため」に生き、「休息」してしまった日本人の魂の空洞を見つめる福沢の視線と、フランス革命から半世紀余り、マモン神と大審問官ナポレオン三世に魂を売り渡し、革命の理念を忘れ去ったパリっ子たちの「縮こまってゆく」精神を凝視するドストエフスキイの視線とは、別種のものとは思えません。また「外国交際の病」を見据える福沢を捕えていた危機感と、ロンドンの弱肉強食の世界をバアルの支配だと断じるドストエフスキイを捕えていた危機感との間に、違いがあるとも思えません。西欧世界に関する二人の認識がほぼ同じである一方、それに対する診断書と処方箋が大きく違うこと、むしろ私はここに関心を惹かれ、思索の課題を見出しています。

福沢が日本人の魂の空洞を「病」として捉えたことは明らかなです。しかし彼はこの「病」を最終的に「外国交際の病」と呼び、西洋文明列強が繰り転げる帝国主義的海外侵略の戦いとして捉え、明治維新と共にこの熾烈な戦いに巻き込まれた日本が、それに如何に対処すべきかを喫緊の課題としたのでした。それは西洋列強が展開する複雑な武力外交の中で、最も有効かつ現実的な日本の立ち位置を見極め、それと呼応した国内統治の方法を見出そうという、この上なく困難な課題でした。その後日本が辿った道は、彼の対処法がどこまで適切であったかに強い疑問符を投げかけざるを得ません。しかし我々がなお福沢の時代と同じ困難な位置に置かれていることに変わりはなく、彼が対峙した「外国交際の病」は今も我々の「病」であり続け、また乗り越えがたい「壁」であり続け、我々はそれへの対処法を未だ見出せてはいないのです。

福沢が「病」に対する対処法を、専ら国際政治の力学の内に見出そうとしたのに対して、ドストエフスキイは西欧近代の「病」を、まずパリに於いては人間の魂が陥った内なる「病」として捉え、それへの治癒策として十字架のイエスを基にした「自己犠牲」の精神を提示し、またロンドンに於いてはこの「病」をバアルとマモンによる人間支配として診断し、これら異教神・悪魔に対する「幾世紀にもわたる精神的抵抗と拒否」の必要を訴えたのでした。このドストエフスキイの思索の中心にあったのは聖書、殊に新約聖書であり、イエス・キリストであったことも忘れてはならないでしょう。

二人が見つめた「病」は今もなお増殖を続け、しかも以前よりも更に悪性化した「病」として世界中に蔓延しつつあり、我々の前に乗り越え難い「壁」として立ち塞がっていることは明らかなです。西洋近代に発する「病」・「壁」を、福沢とドストエフスキイ二人が如何に捉え、そして如何なる対処法・治癒策を求めたか、改めて我々自身が目を向け、参考にすべき時は今であると思います。皆さんがこの問題についてお考えになる上で、今日の私の話が一つの手掛かりとなるならば嬉しく思います。 ご清聴、有難うございました。

(了)

関連年表

福沢諭吉	(日本)	(ロシア・世界)	ドストエフスキ
36 35 誕生(大阪) 父の死(家族は中津へ)	25 異国船打払い令 大塩平八郎の乱	15 ナポレオン没 七月革命	21 誕生(モスクワ)
41 天保の改革	40 アヘン戦争 太平天国の乱	42 二月革命	39 38 37 母死。ペテルブルクに 工兵学校に入学 父・農奴に救済される
54 53 ペリー来航 日米和親条約	52 ナポレオン III 政・帝位に 事件で逮捕	49 ペトラスエフスキ 事件で逮捕	45 『貧しき人々』で文壇に
56 55 54 長崎(蘭学修業) 通訳(大坂)入門 兄の死(中津)通訳再入門	57 56 アロー号事件 セボイの乱	54 懲役終了。国境警備隊へ	59 ペテルブルクに帰還
58 江戸へ。塾地に蘭学塾 オランダ語から英語へ 咸臨丸でアメリカ渡航	59 58 日米修通商条約 安政の大獄	57 結婚	シベリア時代
60 59 58 咸臨丸でアメリカ渡航	61 南北戦争(米) 農奴解放令(露)	62 ヨーロッパ事情探案の旅	

01	99 98 94	85	82	79 78	75	73 72	69 68 67 66	63 62	ヨーロッパ事情探案の旅
死亡・大蔵院独立自尊居士	『福沢全集』 『福沢自伝』	『脱亜論』	『時事新報』発刊	東京学芸大・会長に 『通論』掲載	『文明論之概略』	明六社結成 『学問のすゝめ』	『西洋事情』(初編三巻) 二度目のアメリカ渡航 『訓政考略』 『世界図説』	『西航記』	
00	94 90 89	81	77 76	74 73 72 71	69 68 67 66	64			
北清事変	日清戦争に献金 第一回帝国議会	日清戦争	大日本帝国憲法 第一次長州征伐	西南戦争 徴兵令・地租改正令 民選議院設立建白書 学制の制定	薩長同盟 大政奉還 五箇条の御誓文 版籍奉還	薩長同盟 大政奉還 五箇条の御誓文 版籍奉還			
1900	90	80	70						
01	99 96	84	77	71	69	67	64		
シベリア鉄道開通	第一回近代オリンピック 米・門戸開放宣言 義和団事件	清仏戦争	露土戦争	露土戦争 パリ・コンミュニ	スエズ運河開通	マルクス『資本論』	第一回シベリア		
			81 79	76	71	68 67 66	64 63		
			死亡 『カラマゾフの兄弟』	『未成年』 雑誌『作家の日記』	『悪童』 陽曲	『地下室』 『罪と罰』 『死の屋敷』 『地下室』 『死の屋敷』 『罪と罰』 『地下室』 『死の屋敷』 『			

キー・ワード・50

★当日配布のプリントの中に、出席者の方たちが話の流れを随時確認出来るように、また備忘録としても利用出来るようにと、「キー・ワード・50」を入れました。「キー・ワード」と言うよりは、むしろ「キー・テーマ」と言う方が正確でしょうが、参考にして下さい。

これら50の中には、その場で十分に言及し切れなかったものや、話の流れから新たに言及したもの、順序の入れ替わったものも二-三あります。これに従って、この「研究会便り(15)」に掲載するにあたっては、当日配布したプリントの一部を手直ししました。

★これら50項目を順次繋いでゆくことで、私の話を再現することが可能になるかと思います。しかし何よりも皆さんに期待することは、これらの語句や概念を参考にして、自分自身で二人の旅を組み立て直し、自分自身の『夏象冬記』ないしは『西航記』を構成し、そこから西欧近代とそれを採り入れたロシアと日本の近代について、また近代が宿す「病」に対しドストエフスキと福沢が提示した「治癒策」について、是非、皆さん自身が検討をし、思索を試みて頂くことです。

1. はじめに

1. ドストエフスキとの取り組み、「病」からの「癒し」、キリスト教文学、イエス像

2. 福沢の旅、その目的・期間・旅程

2. 1860、日米修好通商条約・批准書交換、咸臨丸
3. 1862、外国方翻訳局員、備通詞、遣欧外交使節団
4. 『福翁自伝』、青春の書、(「豪傑」、ロンドンの地下鉄工事、慶應義塾大学)
5. 三港の開港、生糸の流出、物価の高騰、尊王攘夷派の反幕運動
7. 「開市(江戸・大坂)開港(新潟・兵庫)」の延期交渉
8. 西洋事情探索
9. カラフトの日露国境画定交渉
10. 「大君の使節」(38名、正使・竹内下野守保徳)
11. 英軍オージン号(帆汽両用2千トン)、南回りの旅(品川→香港→シンガポール→ゴア→スエズ→カイロ)
12. アジアの植民地化(アヘン戦争・太平天国の乱・アロー号事件・セボイの乱)、スエズ運河、マルセイユ
13. 海路の片道二カ月半、1862/1/22~1863/1/29 ⇨ ドストエフスキ 1862/6/19~9/4

3. 『夏象冬記』までのドストエフスキ

14. 『貧しき人々』(1845)、反政府陰謀による逮捕、(皇帝による)死刑執行劇
15. 10年のシベリア流刑生活、『死の家の記録』(1861)、ロシア民衆との出会い
16. 「聖書熟読といふ體驗」(小林秀雄)、キリストの「信条」(六つの形容詞)、帰還(1859)

- 17. ピョートル大帝の西欧化政策、西欧派 vs. スラブ派、土地宣言
- 18. 「夏象冬記」と「夏炉冬扇」、有用性と無用性、変化球と剛速球、「原始星雲」

4. 西航までの福沢諭吉

- 19. 「忠孝の精神」「武力」による人民支配、「門閥制度は親の敵」
- 20. 蘭学・洋学修行、大坂緒方洪庵の適塾
- 21. お稲荷様の社、合理的・客観的・科学的思考、「カラリとした精神」
- 22. 福沢の資料；『西航手帳』（62）、『西航記』（63）、『西洋事情』（66）、『文明論之概略』（75）
- 23. ドストエフスキイの資料；『夏象冬記』（63）、『地下生活者の手記』（64）、『罪と罰』（66）

5. 福沢の「西洋事情探案」

- 24. スエズ-カイロ間、蒸気車の体系的探索（『西航手帳』→『西航記』→『西洋事情』）
- 25. 合理的・客観的・科学的リアリズムによる「西洋事情探案」
- 26. 幕末『西洋事情』の成功、啓蒙の旗手
- 27. 『文明論之概略』、明治10年、文明開化に射す影
- 28. 「唯銭のため」「休息する人民」（魂の空洞という「病」）
- 29. 「病」への処方箋； a. 天皇制 b. キリスト教 c. 儒教 （→ 却下）
- 30. 草の根民主主義的啓蒙 → 「一身独立」「一国独立」の道
- 31. 「外国交際の病」（もう一つの「病」）→ 「富国強兵」「国権中心」の道

5. ドストエフスキイが見たパリ

- 32. 蒸気車・近代合理主義精神への「否」、（「 $2 \times 2 = 4$ 」「ピアノの鍵盤」「対数表」「蟻塚」「水晶宮」）
- 33. 『地下生活者の手記』、精神の恣意性と絶対的自由への希求
- 34. オスマンのパリ大改造、「縮こまってゆく」「小銭」の精神 （→ 「死に至る病」）
- 35. ボードレールの「畜群」批判、「猿」、小市民性
- 36. 「自由・平等・友愛」；フランス革命の理念の消滅
- 37. ドイツのシラー的浪漫主義精神
- 38. 「百万フランの自由」、「平等」の不在、「友愛」の精神の不在
- 39. 西欧社会の「個人主義」と「他者との対立」の原理（→ それへの「否」）
- 40. 「病」への処方箋；「個性の最高度の発達」と「自己犠牲」
- 41. 十字架・火刑台（十字架上のイエス像←シベリアのイエス像）
- 42. 「病」への処方箋；「互いに愛し合いなさい」（ヨハネ伝の「告別説教」）
- 43. 犠牲愛、「実行的な愛」（『カラマーゾフの兄弟』）

6. ドストエフスキイが見たロンドン

- 44. 「バビロン」ロンドン、黙示録的終末論的世界

- 45. 「バアル」の支配（⇔「マモン」の支配）
- 46. バアルへの「幾世紀にもわたる精神的抵抗と否定」
- 47. ヘイ・マーケットの女性たち（→後期作品群における展開）
- 48. 聖書伝道の女、ラザロの復活（ヨハネ伝）、『罪と罰』のソーニャ
- 49. 「病」への処方箋；犠牲愛、「実行的な愛」の実践

7. おわりに

- 50. 1862年、二人が直面した「病」→現代、我々が直面する「病」

次回の「ドストエフスキ研究会便り（16）」について

次回は、昨年（2019年3月）、日本キリスト教文学会・東京支部の月例研究会で「カラマーゾフの兄弟、そしてスメルジャコフ」と題して行った発表を原稿化し掲載します。スメルジャコフが体現する闇を考えることは、今回ドストエフスキと福沢が西欧近代の内に見出した「病」を理解することとも深く繋がるはずです。今回とセットで、皆さんの思索の参考として頂くとよいかと思います。

使用した図版や地図・年表は、

ドストエフスキの写真以外のものは全て、

拙著『隕(お)ちた「苦艾(にがよもぎ)」の星(ほし)』

(1997,河合文化教育研究所)から採りました。

ドストエフスキの写真の出典については、

写真下に記してあります。